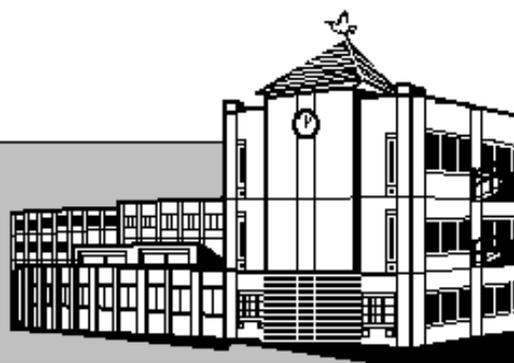


図書館だより



2001年度 第3号 (2002年3月)

編集・発行 敬和学園大学図書館

目次

「100年前、50年前の日本と中国・・・そして君たち」.....国際文化学科教授 浅野 幸穂 (1)
「中野文庫」に寄せて..... 英語英米文学科長 北嶋 藤郷 (3)
図書館報告..... (4)
事務室より..... 図書館長 柴沼 晶子 (4)

100年前、50年前の日本と中国...そして君たち

国際文化学科教授 浅野 幸穂

この一文は、今年1月11日「最終講義」としてお話した内容がもとになっています。当日与えられた時間はごく限られたものでしたから、できるだけ視覚化して、大きな筋として若い諸君に考えてほしいことを話したつもりですが、やはり伝えたいことは十分展開できなかつたように思います。そこで、この機会を与えられたのを幸いに、最終的には読書ということに結びつく形で、今一度述べることにします。

さて、私たちは21世紀最初の年を送って2年目を迎えました。21世紀は、大規模テロや世界大不況という大変な幕開けになってしまいました。同時に私たちの身近では、世界経済の大きな構造変動が進んでいます。一方で、最近よく耳にする中国の「世界の工場」化という現象がみるみる広がり、中国は安くてよい工業製品を世界に供給しています。その一方で、これまで「世界の工場」であった日本は、「失われた十年」を経てその地位を失い、「産業の空洞化」に苦しんでいます。合わせて考えますと、激しい国際競争のなかでコスト高に悩む日本企業が続々と生産施設を中国に移し、奔流のような海外からの直接投資(年間400億ドル)で集積された中国

の生産力を一層強化している姿です。日本と中国で起きていることは1枚のメダルの表と裏なのです。このことの意味をわかりやすくするために、まず、今から100年前、1902年と50年前、1952年の二つの時点をとって、両国の位置関係を振り返ってみることにします。

1902年の日本と中国

1902年は、中国では清朝最末期に当たります。ちょうど「北清事変(1899-1901)」を、列強に巨額の賠償金を支払うことで収拾したところです。前世紀半ばのアヘン戦争以来、清国は次々と列強に国家主権を譲り渡して「半植民地」の状態がありました。これにいきどおる秘密結社義和団の運動は、排外主義的とはいえ、不甲斐ない政府頼むに足りずとするナショナリズムでした。

日本では、この年は明治35年に当たります。対照的なことに日本は、北清事変の際、列強8カ国の連合軍の一員として北京占領に参加して活躍し、償金にもあずかりました。つまり、半植民地中国に襲いかかった帝国主義の側に身を置いていたのです。すでにその数年前には、朝鮮の宗主権をめぐつ

て日清戦争（1894 - 95）を仕掛けて、台湾の割譲（と一時は遼東半島の租借権も）を受けていました。

東アジアにおける日中の対照的な位置関係は、明治維新によって日本がアジアでは例外的に近代化に成功し、中国はそれに失敗したということに尽きます。日本は、急速に近代国家としての制度を整備し、産業革命を軌道にのせ、そして近代教育を普及させていきました。対する中国では、近代化の必要に気づいた先覚者の改革運動も守旧派に押しつぶされ、老大国の屋台骨は急速に傾いていきました。孫文らの辛亥革命が成功するのは、これから10年足らず後のことですが、革命の旗上げはこの時すでに始まっています。

明治維新以降、日本がアジアで唯一といってよい近代化を成功させたことの意義は、いくら強調してもしすぎることはありませんが、日本がその後、日露戦争（1904 - 05）第一次世界大戦（1914 - 18）を通して、大国の一角を占めていく過程で「軍国化」していったことも否定できない事実です。特にその矛先は、韓国を併合（1910）したあと、中国大陸に向けられます。辛亥革命後の中国の近代化努力を押しつぶして自己の利権の確保・拡大に狂奔し、のちの太平洋戦争敗戦の下地を作っていきます。

ついでに言いますと、今から70年前の1932年は、前年に満州事変を引き起こした日本が傀儡国家「満州国」をでっち上げた年です。そしてその5年後の1937年からは盧溝橋事件の火花が燃え広がって日中戦争となり、ついには太平洋戦争（1941 - 45）という大火を誘発して、みずからを焼き尽くすことになるのです。

1952年の日本と中国

50年前の日本と中国は、アジアの冷戦という国際環境によって大きくその運命をゆさぶられました。1945年の敗戦に打ちひしがれた日本が経済復興の方途を探っていた時、中国は勝利した連合国の5大国の一員でありましたし、戦後の内戦のなかから1949年に中華人民共和国が誕生し意気揚がっていました。しかし1950年に朝鮮半島で火を吹いた「朝鮮戦争」がこの位置関係を一挙に狂わせました。

1952年 中国は朝鮮半島でまだ米軍と交戦中でした。やっと翌年、スターリンの死によって停戦が実現し、第1次5カ年計画が開始されました。それまでは、すぐにも着手したい経済建設に本格的に取り組むことができませんでしたし、あらたに戦費の負担ものしかかりました。その上、朝鮮半島を北上して自国国境近くに迫ったマッカーサーの「国連軍」に対抗して、義勇軍の形で参戦したために、国連から「侵略者

の烙印を押され、以後国際的に孤立を余儀なくされました。一方、開戦と同時にアメリカが台湾海峡を海軍力で封鎖したため、「台湾解放」の課題達成は不可能となりました。

他方、日本の運命は朝鮮戦争によって思わぬ後押しを受けました。非武装化と工業力抑制の初期の対日政策を一変させ、アメリカは日本の自立化を急ぐこととなります。1952年4月28日は、前年9月に調印されたサンフランシスコ平和条約が発効した日です。日本はほぼ7年ぶりに主権を回復しました。当時のわずかな輸出品である繊維・雑貨も、それまでの「メイドイン・オキュパイド・ジャパン（占領地日本製）」から、晴れて「メイドイン・ジャパン」と表示されるようになりました。それに朝鮮戦争は、日本にとっては出撃する米軍への補給物資の注文殺到（いわゆる「朝鮮特需」）を意味しました。不況にあえいでいた日本企業はたちまち息を吹き返し、経済の好循環が始まります。1950年代半ばには戦前の経済水準を回復し、1960年代からは驚異的な高度成長が始まり、早くも1968年にはアメリカに次ぐ自由世界第2位の経済規模に達します。その後の発展はもはや言うまでもないでしょう。70年代、80年代と円はどんどん強くなり、日本は良質な工業製品を供給する「世界の工場」の名をほしいままにしました。

欧米列強に追いつこうとした戦前の急速な経済発展を「キャッチアップ」とするならば、それが敗戦で一旦崩壊していわばゼロになった状態から、急速に築き上げた戦後の高度成長と経済大国化は、「キャッチアップ」と言ってよいかもしれません。

そして、現在

2002年現在にもどって、今私たちが置かれている状況を考えてみましょう。

今の事態は、一口で言って、日本のキャッチアップが終わって足踏みを続けている間に、いまや中国のキャッチアップの過程が加速して「『世界の工場』の交代」が起こっていると言ってよいでしょう。戦後、営々と続けられてきた日本のキャッチアップ努力は、1980年代をピークにその過程を終え、今は次の目標を探しあぐねて混迷に陥っているようにみえます。対して中国は、国際的に孤立した状態で独自の「社会主義の道」を模索して曲折を重ねた末に、毛沢東の死後、鄧小平の下で「改革・開放」（1978）に踏み切りました。それ以来、範を世界に求めて大胆に外国の資本・技術・経営ノウハウを取り入れました。天安門事件（1989）の逆流も、今から10年前の鄧の遺言とも言える「南巡講話」で一層の「市場経

済化)を確認して乗り切り、今日に至っています。

「世界の工場」の交代自体はなんら異とするに足りません。「栄枯盛衰」は世の習いであって、世界経済の主役の交代は、産業革命の先頭を切り、当時の「世界の工場」であったイギリスの後退に好例を見ることができましょう。「後発の強味」と言って、後からスタートした者は、先行者の成功や失敗の経験に学び、はるかに早いスピードでそれに追いつき追い越すことができます。中国がキャッチアップに当たって外資に依存する点が多いことも明らかです。日本としては、大量生産できるものは中国などアジアに譲り、いわゆる高度な「知識産業」に活路を見出すしかないでしょう。

そこまで考えてきて愕然とさせられました。知識産業の「知」は果たして大丈夫か。長期不況、高失業率、何よりも「霧の中」に入ったような前途の不透明さに打ちひしがれた日本人、とりわけ若い人たちの無気力な姿が目に見えびます。ようやくやかましく叫ばれはじめたように、すでに、読み、書き、算数といった基礎学力まで蝕まれてきています。

恐らく、中国その他アジアの若者と日本の若者との決定的な差は、彼らには「自分たちもゆたかになりたい。そのためには何を勉強したらよいのか」という、激しい探求心、俗に言う「ハングリー精神」があり、君達にはないということでしょう。アジアを歩けば、夜店の傍らで、あるいは店番をしながら、暗い街灯や裸電球のもとで勉強している子供の姿を

よく見かけます。最近、報道されたOECD32カ国の「15歳層学習到達度調査」の記事を読みながら（『日本経済新聞』2001・12・5）私が思い浮かべたのはその光景でした。日本の高一は国際間で平均勉強時間は最低、とりわけ「読書をしていない」人たちが53%もいるというのです。

この数字は、毎日若い人たちと接する私の実感とも符合します。たとえば、電車に乗っていると、「ケータイ」で無意味なおしゃべりに夢中になりはするが、あるいは、はばかりとくなく人前で化粧に余念はないが、本を開く若者のなんと少ないことか。レポートを書かせてみましても、本を読む時の、書き手の言おうとしていることの筋道を追うために要求される、最初の10頁を読みつづける忍耐力のなさに気づかれます。いったい、ものを読んで、考えないで形成される「知」など、どこにあるのでしょうか。

1950年代に学生時代を送った私など、飢餓感の経験があります。今の諸君の「何とかなるさ」という太平楽は、先行する世代の努力と労苦が作り上げた豊かさにおんぶすることで可能になっている面があります。これまでの日本の優位が剥げ落ちつつある今、私はむしろ、日本が落ちるところまで落ち、次世代の諸君が裸一貫から（あるいはその気持ちで）奮起して、自分たちの努力と工夫で新しい日本の社会を再構築してくれることをひそかに期待しています。

（2002年2月）

「中野文庫」に寄せて

英語英米文学科長

北嶋 藤郷

中野孝次先生は、現代ドイツの代表作家ギュンター・グラスの『犬の年』などの翻訳紹介、小説、日本文学の批評、エッセイなど多才な執筆活動を続けています。一匹の柴犬との13年の歳月を描いた愛犬物語『ハラスのいた日々』や生活を極限にまで簡素化して、心の豊かさを求めた良寛などの清貧に生きた先人の系譜を辿って、現代社会にいか生きるべきかを改めて問い直した『清貧の思想』は読者に大きな感動を与えました。

中野先生は、日本エッセイスト・クラブ賞、新田次郎文学賞、芸術選奨文部大臣賞などの受賞に輝く作家であります。本学の学生諸君には、犬好きの人も多いと思いますが、まずは先生の『ハラスのいた日々』と『犬のいる暮らし』から読みはじめて、上記の『犬の年』を読破したら興味深いだろうと考えます。

先生の小説の堅実な作風には高い評価がよせられています。新潟県の村上を舞台にした作品『海の歌』には、本学の女子大生の父親と推論できる吉野繁なる人物が登場します。「吉野繁はかつてわたしが大学で教えていたころの学生で、ドイツ語教師のわたしよりドイツ語が達者になり、・・・」といった表現が随所に書き込まれ、気心の知れた二人の垂直な師弟関係には、ほのぼのとした温かさを感じます。

その吉野繁氏を介して、本学の図書館に「中野文庫」が誕生したことを、心から喜んでおります。『中野孝次作品』（全10巻）をはじめ、今年出版されたばかりの『今を生きる知恵』までが先生の寄贈図書の中に含まれています。中野先生とその弟子・吉野繁氏に感謝しつつペンをおきます。

中野孝次先生寄贈図書



中野孝次 『中野孝次作品』(全10巻)
 中野孝次 『犬のいる暮らし』
 中野孝次 『いまを生きる知恵』
 中尾實信 『いのちの螺旋』
 山田春木 『こわい病気のやさしい話』
 森谷正規 『ナノテクノロジーの「夢」と「いま」』
 渡辺茂 『ヒト型脳とハト型脳』
 柴田正良 『ロボットの心』
 日本の文藝家協会 『歌のいろいろ』
 大場秀章 『花の男シーボルト』

NHK放送文化研究所編
 『現代日本人の意識構造第五版』
 フフバトル 『私が牧童だったころ』
 伊藤信吉 『詩集 老世紀境界で』
 中室勝郎 『漆の里・輪島』
 渡邊行男 『守衛長の見た帝国議会』
 塩谷清人 『十八世紀イギリス小説』
 深尾光洋 『日本破綻』
 山本武利 『日本兵捕虜は何をしやべったか』
 Pehlke, Horst. *Das erste Wort*



図書館報告

今月は環境に関する図書をご紹介します。

高寄省三 『ごみ減量再資源化政策』
 国政情報センター出版局
 『一目でわかる！容器包装リサイクル法』
 環境衛生施設整備研究監修
 『日本の廃棄物 2000』
 山崎達雄 『洛中塵捨場今昔』
 中村三郎 『リサイクルのしくみ』
 本多淳裕 『絵で見る工業生産とリサイクル』
 本多淳裕 『絵で見る消費生活とリサイクル』
 石川禎昭 『これからの廃棄物処理と地球環境』
 溝入茂 『ごみの百年史』
 松田美代子 『本当のリサイクルがわかる本』
 福島哲郎編著 『図説リサイクル法』
 志村隆編集 『最新版地球環境白書 4』
 本多淳裕 『ごみ対策が危ない』
 北野大他 『ゴミ・リサイクル・ダイオキシン』
 畠山武道 『自然保護法講義』
 リサイクル法令研究会監修
 『家電リサイクル法(特定家庭用機器商品化法) Q&A』
 岩波講座 『地球環境学全 10 巻』
 吉村七郎 『リサイクル社会が始まった』
 植田和弘 『廃棄物とリサイクルの経済学』
 小島覚 『人類の繁栄と地球環境』
 奥田四郎他 『地球の資源と環境』
 佐島群已監修 『リサイクルでゴミをへらそう』
 石井実 『里山の自然を守る』
 今泉みね子
 『ドイツを変えた 10 人の環境パイオニア』

蔵書数

(2002年2月28日現在)

区分	和	洋	合計
図書資料	37,464	13,257	50,721
逐次刊行物(種)	99	86	185
視聴覚資料	392	274	666



事務室より

図書館長 柴沼晶子

今年度まで国際文化科でアジアの経済を講じ、ゼミでご指導下さった浅野先生は、1997~1998年の2年間図書館長として本学図書館の充実・発展に力を注がれました。この『図書館だより』を発刊され、知の宝庫である図書館が少しでも親しまれるようにとアピールされましたし、この図書館が大学図書館としての機能を発揮できるように、広く基本的図書の蒐集にも尽力されました。最終講義では百年と五十年前の日中の姿を跡付けて、現在世界に飛躍する中国の強力なエネルギーを支えている中国の若者と対比して日本の無気力な若者の姿を憂いながらもなお、新しい日本を再構築することを学生の皆さんに期待しておられます。この論考を味読して、私たちはいま何をすべきなのかをご一緒に考えてみたいと思います。

北嶋先生のご紹介のように、昨秋「中野孝次文庫」が誕生しました。本学図書館の宝物の一つとなるでしょう。近日中に専用の書架が入ります。図書館の宝物は飾りではありません。中野孝次先生の作品に導かれて、物心ともに雑多なものに囲まれている日常生活から心豊かな世界に分け入っていきたいものです。

